

# 大学生のマウンティング行為が受け手に与える影響

## Impact of mounting behavior of college students on recipients

幸山 知聖<sup>\*1</sup>・原 郁水<sup>\*2</sup>

Chisato KOUYAMA<sup>\*1</sup>・Ikumi HARA<sup>\*2</sup>

### 要 旨

マウンティングとは本来、ニホンザルが社会的順位を確認するために上位のものが下位のものに対して行う（広辞苑、第七版）行為のことであるが、近年では、『自分の方が立場が上』と思いたくて、言葉や態度で自分の優位性を誇示してしまうこと<sup>1)</sup>（瀧波・犬山，2014）として用いられることが多くなっている。本研究では実際に大学生のマウンティングをしている者が、受け手に与える影響についてシナリオ法により調査を行い、投影法を用いて回答を求め受け手の心情理解を図り、マウンティングが与える精神的な影響（ストレス反応等）を明らかにすることを目的とし、A県B大学に在籍する大学生209名を対象に調査を行った。その結果、マウンティング行為により受け手に精神的な影響（ストレス反応）があることが明らかになった。

キーワード：マウンティング，自己肯定感，大学生，ストレス反応

### 1 はじめに

本来、マウンティングとはニホンザルが社会的順位を確認するために上位のものが下位のものに対して行う（広辞苑、第七版）行為のことであるが、近年では『自分の方が立場が上』と思いたくて、言葉や態度で自分の優位性を誇示してしまうこと<sup>1)</sup>として用いられることが多い。市川（2019）は、Twitterやブログ、テレビ番組等からマウンティングに該当するものをまとめ、ポライトネスの原理（お互いのフェイス（自己決定・他者評価の欲求）を脅かさないように配慮した言語行動のこと<sup>2)</sup>）からマウンティングになる発話の特徴を探った。その結果、「自己への肯定的内容への言及・肯定的な語彙の使用」等の5つに分類された<sup>2)</sup>。また、森・石丸（2021）は、女性間のマウンティングに注目し、書籍やテレビドラマから該当するエピソードを収集した。結果、20の概念を生成し、3つの上位カテゴリー（伝統的な女性としての地位・能力を誇示する／自立した人間としての地位・能力を誇示する／女性としての性的魅力を誇示する）にまとめられ、女性の間にもみられるマウンティングは一方では

勝てるが一方では勝てないというような三すくみが存在するため、優劣を決定することができずに繰り返されてしまう<sup>3)</sup>ことが述べられている。このようなマウンティングの特徴や実態を述べている論文は存在するものの、実際にマウンティング行為が与える、マウンティングされたと感じている者（以下、受け手とする）への影響に関する研究は見られない。本研究では、「自己への肯定的内容への言及・肯定的な語彙の使用」、「他者への否定的内容への言及・否定的な語彙の使用」、「ポライトネスな姿勢が見られるマウンティング」の3つに焦点を当て、実際に大学生のマウンティングをしている者（以下、送り手とする）が、受け手に与える影響についてシナリオ法により調査を行い、投影法を用いて回答を求め受け手の心情理解を図り、マウンティングが与える精神的な影響（ストレス反応等）を明らかにすることを目的とする。

マウンティングが与える精神的な影響について検討する際に、直接マウンティングについて研究したものではないが、自己呈示研究が参考になる。沼崎・工藤（2003）や岡田・五味・山崎（2020）の研究において、自己高揚的呈示（自分ができることを積極的に

\*1 弘前大学卒業生  
Graduate of the Faculty of Education, Hirosaki University

\*2 弘前大学教育学部教育保健講座  
Development of School Health Science, Faculty of Education, Hirosaki University

主張し他者から高い評価を得ようとする行為のことは、「有能さ」において高い評価が得られやすいものの、「親しみやすさ」においては低い評価になり得やすいと述べられている<sup>4)5)</sup>。また、内藤(2020)は、「まわりの人よりも自分が優れている」と感じられる状況で生きたほうが、幸せでいられると提言している<sup>6)</sup>。そのため、「自己への肯定的な内容への言及・肯定的な語彙の使用によるマウンティング(以下、「肯定的な語彙の使用によるマウンティング」)」では、受け手はストレスを感じると推測できる<仮説①>。同様に、「他者への否定的内容への言及・否定的な語彙の使用によるマウンティング(以下、「否定的な語彙の使用によるマウンティング」)」においても、送り手が受け手に対し、否定的な語彙を使用している<sup>2)</sup>ため、受け手は否定されたと感じると予想できることから、他のマウンティングに比べ、受け手はストレスを感じやすいと推測される<仮説②>。一方で、「ポライトネスな姿勢の見られるマウンティング」では、送り手が受け手に対して「スタイルがよい」「おしゃれ」「うらやましい」等、賞賛や羨望の語彙を用いている<sup>2)</sup>ため、他のマウンティングに比べて、受け手はストレスを感じにくいと推測される<仮説③>。また、上田ら(2012)や森川ら(2020)の研究より、自己に対する肯定的な評価が高い者は、ストレス耐性度(ストレス耐性に対する認知、評価、対処する機能のこと)が高くなり、自己肯定感の高さがストレス対処行動に影響を与えることが報告されている<sup>7)8)</sup>。このことから、自己肯定感が高い者は、低い者に比べてマウンティングによるストレスを感じにくいと推測される<仮説④>。先行研究から立てられる仮説をまとめると下記ようになる。本研究ではこの仮説の検証を行う。

<仮説①> 肯定的な語彙の使用によるマウンティングの場合は、受け手はストレスを感じる<sup>4)5)6)</sup>。

<仮説②> 否定的な語彙の使用によるマウンティングの場合は、他のマウンティングに比べ、受け手はストレスを感じやすい<sup>2)</sup>。

<仮説③> ポライトネスな姿勢が見られるマウンティングの場合は、他のマウンティングに比べ、受け手はストレスを感じにくい<sup>2)</sup>。

<仮説④> 自己肯定感が高い者は、低い者に比べてマウンティングによるストレスを感じにくい<sup>7)8)</sup>。

## 2 対象及び方法

### (1) 調査対象

A県B大学に在籍する大学生209名を対象とした。有効回答は205名(男性52名、女性153名、有効回答率は98%)であった。

### (2) 調査期間

2021年11月20日から同年12月11日まで。

### (3) 調査方法

Google フォームを用い、縁故法、雪だるま法による調査を行った。

### (4) 調査内容

#### ① 対象者の属性

調査対象者の性別、学部、学年について尋ねた。

#### ② SRS-18 (ストレス反応尺度)

鈴木ら(1997)<sup>9)</sup>が作成した「SRS-18 (ストレス反応尺度)」(18項目3因子)のうち各因子(抑うつ・不安「泣きたい気持ちだ、悲しい気持ちだ、気分が沈んでいる、何となく心配だ」、不機嫌・怒り「怒りを感じる、イライラする、悔しい思いがする、不愉快だ」、無力さ「よくないことを考える、根気がない、いろんなことに自信がない、何かに集中できない」の3因子構造)から4項目ずつ選択し、全12項目で「全く違う」「いくらかそうだ」「まあそうだ」「その通りだ」の4件法で投影法を用いた回答を求めた。段階順に0~3点として36点満点で合計点を算出し、高い値ほどストレスを感じていると評価した。

#### ③ 受け手が送り手から受けた影響

吉田ら(2004)<sup>10)</sup>が作成した「他者反応受領後の自己評価」を参考に自作したものをを用いた。「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの5件法で投影法を用いた回答を求めた。項目は、「1. A(送り手)が他人よりも優れていると思う」「2. 自分自身の全体的な自信がなくなる」「3. AはB(受け手)を正確に理解してくれると思う」「4. Aが他人よりも劣っていると思う」「5. Aから客観的な意見を得れたと思う」「6. 会話の内容(勉強)に対しての自信がなくなる」であった。また、調査対象者の回答内容によってストレス反応尺度に影響(精神的な影響)があるかを検討するために、検定を行う際、各質問項目の回答によって2群に分けた。「非常にそう思う」「そう思う」と回答した者を「送り手からの影響高群」、 「そう思わない」「全くそう思わない」と回答した者を「送り手からの影響低群」とした。

#### ④ マウンティングの有無

瀧波ら (2017)<sup>11)</sup> のマウンティングの定義を参考に、「マウンティングとは、相手の言葉や態度で、受け手が下に格付けされたと感じるもの」とし、「各シナリオがマウンティングであると思うか」の問いに対し「はい」または「いいえ」で投影法を用いた回答を求めた。

#### ⑤ 自己肯定感尺度；5件法9項目

吉森 (2015)<sup>11)</sup> が作成した「自己肯定感尺度」を用いた。本尺度は9項目2因子（無条件の自己肯定、安定した自己）構造であり、「全くあてはまらない」「あてはまらない」「どちらでもない」「あてはまる」「非常にあてはまる」までの5件法で回答を求めた。段階順に1～5点として45点満点で算出し。調査対象者の平均点以上の者を「自己肯定感高群」、平均点未満の者を「自己肯定感低群」の2群に分けた。

本研究では、②③④の質問項目は各シナリオ（肯定的な語彙の使用によるマウンティング、否定的な語彙の使用によるマウンティング、ポライトネスな姿勢が見られるマウンティング、比較文）においてそれぞれ回答を求めた。

#### (5) 分析方法

各調査項目において、性差の有無を確認するために、 $\chi^2$ 検定、Mann-Whitney のU検定（以下、「U検定」）を行った。また、ストレス反応尺度及び受け手が送り手から受けた影響において、各シナリオ間に差があるのかを検討するために、Friedman 検定を行い、有意差が認められたため、Bonferroni の多重比較を行った。受け手が送り手から受けた影響の回答により、ストレスの感じ方に差があるのかを検討するために、目的変数を「ストレス反応尺度の合計点」、比較する群を「送り手からの影響高群・低群」とし、U検定を行った。自己肯定感の高さがストレスの感じやすさに差を与えるかを検討するために、目的変数を「ストレス反応尺度の合計点」、比較する群を「自己肯定感高群・低群」としU検定を行った。また、自己肯定感の高さが受け手が送り手から受けた影響の回答に影響を与えるのかを検討するために、目的変数を「受け手が送り手から受けた影響の回答」、比較する群を「自己肯定感高群・低群」としU検定を行った。なお、本研究の有意水準は5%とした。集計はMicrosoft Office Excel<sup>®</sup>2016 for Windows をデータ分析は統計ソフト EZR<sup>12)</sup> を用いた。

#### (6) シナリオについて

対象者に対し、以下の教示文とシナリオを用いて投影法による調査を行った。対象者はシナリオの前に共通する教示文を読み、続いてアからエのシナリオ読んでから各質問項目に答えた。

“会話文にでてくるAさんはメッセージの送り手を表しており、Bさんはメッセージの受け手を表しています。二人の関係性は、さほど仲良くない同い年の知人とします。ある日、テストが返却され、見せ合いをしたところ、Aさんの方がBさんよりもよい成績でした。次の文は、その際のAさんとBさんの会話です。

Aさん：今回のテスト難しかったよね、Bさん、どうだった？

Bさん：かなり難しかった。”

#### ア. ポライトネスな姿勢のみられるマウンティング

Aさん：いつも勉強しているBさんでも難しいんだね。私はあまり勉強しないから。

Bさん：そうなんだ。でも、Aさんの方が点数高いよね。

Aさん：そうだね。講義を聞いてたら、私大体内容を理解できちゃうんだよ。でもちゃんと勉強しているBさんの方がすごいよ。

Bさん：そうかな。

#### イ. 自己への肯定的内容への言及・肯定的な語彙の使用によるマウンティング

Aさん：そうだったよね。

Bさん：うん。でも、私は最後の問題解けてたからすごく嬉しいんだ！

Aさん：そうなんだ。そこの問題なら、私も解けたよ！しかも、難しいって言われていたその前の問題も解けてたんだ！

Bさん：そうなんだ。

#### ウ. 他者への否定的内容への言及・否定的な語彙の使用によるマウンティング

Aさん：うん。でもBさんくらい勉強していたら、点数取れそうなのにな。あれ？Bさん講義休んだりしてた？

Bさん：え、休んでないよ？

Aさん：そうなの？Bさん、あんなに勉強していて点数が取れないなんて…。勉強の仕方を変えた方が良くないんじゃないかな？

Bさん：そうかな。

#### エ. 比較文

Bさん：Aさん、この問題解けた？

Aさん：あー、その問題かー。私も解けなかったんだ。

Bさん：そうなんだ。講義資料に載っているかな？

Aさん：あ、載ってるかもしれないね。確認してみよう。

Bさん：うん。

### 3 結果と考察

#### (1) マウンティングの有無について

各シナリオがマウンティングであるかという問いに対する回答割合を表1に示した。男女間で、 $\chi^2$ 検定を行った結果、「肯定的な語彙の使用」において、有意な傾きが認められ、女性の方が「はい」の割合が高かった。以降は男女別に分析を行う。

表1 各シナリオにおけるマウンティングの有無 ( $\chi^2$ 検定)

	はい		いいえ		$\chi^2$ 検定
	男性	女性	男性	女性	
ポライトネスな姿勢	38名	129名	14名	24名	
肯定的な語彙の使用	29名	115名	23名	38名	*
否定的な語彙の使用	37名	120名	15名	33名	
比較文	0名	0名	52名	153名	

\* $p < 0.05$

#### (2) 各シナリオ間におけるマウンティングに対するストレス反応尺度の比較

ストレス反応尺度の各因子 (I. 抑うつ・不安, II. 不機嫌・怒り, III. 無力さ, IV. 合計) について、Friedman 検定を行った結果、4群間のいずれかに有意な差が認められた ( $p < 0.05$ ) ため、Bonferroni の多重比較を行った (男性: 表2, 女性: 表3)。

肯定的な語彙の使用と比較文の關係に注目すると、男女どちらにおいても、肯定的な語彙の使用によるマウンティングの方がストレス反応尺度の得点が高かった。この結果から、仮説①「肯定的な語彙の使用によるマウンティングの場合は、受け手はストレスを感じる」は支持される。酒井 (1996) の研究では、自己高揚的呈示者は能力・適応度を高く評価されるが好意を持たれにくいことが述べられている<sup>13)</sup>。自己高揚的呈示が好意を持たれにくいということからも、肯定的な内容であったにもかかわらず、受け手の不愉快さに繋がると考える者が多くなり、結果的にストレスに感じられたのではないかと考えられる。

表2 ストレス反応尺度の4群比較 男性(Bonferroniの多重比較)

	①	②	③	④	p値	多重比較
	平均 S.D.	平均 S.D.	平均 S.D.	平均 S.D.		
I. 抑うつ・ 不安	5.5 3.70	4.2 3.28	2.4 3.04	0.8 1.26	0.00***	④<②①***, ④<③* ③<②**, ③<①*** ②<①*
II. 不機嫌・ 怒り	8.3 3.19	7.0 3.24	3.6 3.06	0.7 1.00	0.00***	④<③<②①*** ②<①*
III. 無力さ	4.7 3.15	3.4 2.48	1.9 2.34	0.5 1.02	0.00***	④<③<②<①***
IV. 合計	18.4 7.90	14.7 7.46	7.9 7.76	2.0 2.81	0.00***	④<③<②<①***

①「否定的な語彙の使用」②「ポライトネスな姿勢」③肯定的な語彙の使用④「比較文」

\* $p < 0.05$  \*\* $p < 0.01$  \*\*\* $p < 0.001$

表3 ストレス反応尺度の4群比較 女性(Bonferroniの多重比較)

	①	②	③	④	p値	多重比較
	平均 S.D.	平均 S.D.	平均 S.D.	平均 S.D.		
I. 抑うつ・ 不安	7.4. 3.65	5.9 2.99	3.6 3.36	0.8 1.69	0.00***	④<③<②<①***
II. 不機嫌・ 怒り	8.9 3.22	7.9 3.05	5.3 3.63	0.4 1.24	0.00***	④<③<②<①***
III. 無力さ	6.0 3.38	4.9 2.99	3.0 3.31	0.5 1.29	0.00***	④<③<②<①***
IV. 合計	22.3 8.75	18.7 7.68	11.8 9.53	1.7 3.86	0.00***	④<③<②<①***

①「否定的な語彙の使用」②「ポライトネスな姿勢」③肯定的な語彙の使用④「比較文」

\*\*\* $p < 0.001$

否定的な語彙の使用と他のマウンティングの關係に注目すると男女どちらにおいても否定的な語彙の使用の方が他のマウンティングよりもストレス反応尺度の得点が高かった。この結果から、仮説②「否定的な語彙の使用によるマウンティングの場合は、他のマウンティングに比べ、ストレスを感じやすい」は支持される。吉澤 (2020) の研究では、Martin (1984) が人には承認欲求があり、この承認欲求には、承認 (肯定的な評価を得たい) だけではなく、否定的評価 (他者からの批判や拒否) を避けたいことが含まれていると述べられており、このうち、拒否回避欲求 (否定的評価を避けたい) が社交不安を高めることが述べられている<sup>14)</sup>。他者との会話では、否定的な内容を避け、肯定的な評価を得たいという気持ちが元々備わっている



ため、否定的な語彙の使用によるマウンティングにおいて、ストレスを感じる者が多くなったのではないかと考えられる。

ポライトネスな姿勢が見られるマウンティングと他のマウンティングの関係に注目すると、男女どちらにおいても、ポライトネスな姿勢が見られるマウンティングは、肯定的な語彙の使用に比べストレス反応尺度の得点が高く、否定的な語彙の使用に比べ得点が低い結果となった。この結果から、仮説③「ポライトネスな姿勢が見られるマウンティングの場合は、他のマウンティングに比べ、受け手はストレスに感じにくい」は一部棄却される結果となった。発言内容が能力と一致している場合において、岡田・五味・山崎 (2020) の研究では有能さが高く評価されると述べられ<sup>5)</sup>、沼崎・工藤 (2003) の研究では、社会的望ましさが高く評価されることが述べられている<sup>4)</sup>。このことから、本研究のシナリオでは、「送り手の方が受け手よりも点数が高い」という明確に能力差があることが示されていたため、肯定的な語彙の使用によるマウンティングにおいて、発言内容と能力が一致していると調査対象者が判断し、受け手のストレスに繋がりにくくなったのではないかと推測される。

表4 受け手が送り手から受けた影響 男女比較 (U検定)

項目	平均値(SD)		p 値
	男性	女性	
<b>&lt;ポライトネスな姿勢&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	3.2(0.98)	3.0(1.14)	0.45
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	2.9(1.31)	3.5(1.14)	0.00***
3.AはBを正確に理解してくれると思う	1.8(0.91)	1.6(0.71)	0.13
4.Aが他人よりも劣っていると思う	2.1(0.79)	2.4(0.88)	0.10
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	2.1(1.04)	2.0(1.03)	0.75
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	2.8(1.26)	3.5(1.16)	0.00***
<b>&lt;肯定的な語彙の使用&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	3.1(1.27)	3.1(1.07)	0.63
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	2.4(1.19)	3.1(1.24)	0.00***
3.AはBを正確に理解してくれると思う	1.9(1.01)	1.9(0.90)	0.87
4.Aが他人よりも劣っていると思う	2.0(0.85)	2.2(0.86)	0.08
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	1.9(0.88)	2.0(0.92)	0.91
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	2.3(1.27)	3.0(1.32)	0.00***
<b>&lt;否定的な語彙の使用&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	2.5(1.28)	2.3(1.10)	0.36
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	3.2(1.38)	3.7(1.19)	0.01***
3.AはBを正確に理解してくれると思う	1.8(0.94)	1.8(1.06)	0.65
4.Aが他人よりも劣っていると思う	2.3(0.92)	2.6(1.07)	0.14
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	2.3(1.30)	2.3(1.27)	0.90
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	3.2(1.40)	3.6(1.27)	0.04***
<b>&lt;比較文&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	2.7(1.08)	3.1(0.91)	0.00***
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	1.7(0.92)	1.9(0.85)	0.91
3.AはBを正確に理解してくれると思う	3.2(1.09)	3.5(0.92)	0.04***
4.Aが他人よりも劣っていると思う	1.7(0.78)	1.7(0.76)	0.92
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	2.8(1.16)	3.3(1.05)	0.00***
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	1.7(0.84)	1.7(0.76)	0.39

\*p<0.05 \*\*p<0.01 \*\*\*p<0.001

(3) 各マウンティングにおける受け手が送り手から受けた影響の回答の性差について

各シナリオにおける受け手が送り手から受けた影響の性差を確認するためにU検定を行った (表4)。

結果から、女性の方が男性よりも他者からの影響を受けやすいのではないかと考えられる。若林ら (2006) の研究では、共感が女性の方が男性よりも有意に高い結果が述べられており<sup>15)</sup>、この共感性が高いことによつて、女性は他者の言動に敏感であるために、影響を受けやすくなったのではないかと考えられる。

(4) 受け手が送り手から受けた影響の回答とストレス反応尺度の関係について

ストレス反応尺度と送り手からの影響高群・低群の関係を確認するためにU検定を行った (男性：表5, 女性：表6)。

これらの結果から、男性・女性に関わらず、受け手が送り手から受けた影響に関する質問項目において、受け手の自信がなくなると思うと回答した者の方が、ストレスを感じやすいということがわかる。酒井 (1996) の研究では、他者に揺さぶられやすい人ほど、他人事として捉えることが難しく、感情的に揺さぶら

表5 送り手からの影響 (高群・低群) とストレス反応尺度の平均 (SD) との関係 男性 (U検定)

項目	送り手からの影響		p 値
	高群	低群	
<b>&lt;ポライトネスな姿勢&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	12.7(7.34)	16.8(7.35)	0.11
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	17.6(6.40)	10.8(6.95)	0.00***
3.AはBを正確に理解してくれると思う	6.0(8.49)	15.7(7.01)	0.08
4.Aが他人よりも劣っていると思う	17.0(5.66)	14.5(8.34)	0.67
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	11.0(6.71)	16.0(7.49)	0.11
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	17.7(4.96)	12.3(7.53)	0.01***
<b>&lt;肯定的な語彙の使用&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	8.5(8.71)	7.4(6.90)	0.86
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	16.2(8.16)	4.4(5.83)	0.00***
3.AはBを正確に理解してくれると思う	7.3(13.84)	8.6(7.53)	0.23
4.Aが他人よりも劣っていると思う	12.0(7.07)	7.7(8.22)	0.37
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	0.5(0.71)	8.0(7.44)	0.16
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	15.5(7.89)	4.7(6.13)	0.00***
<b>&lt;否定的な語彙の使用&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	16.8(7.77)	19.2(8.44)	0.31
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	20.7(8.83)	14.8(6.72)	0.03***
3.AはBを正確に理解してくれると思う	10.0(0.00)	18.8(7.59)	0.22
4.Aが他人よりも劣っていると思う	16.7(3.79)	17.6(8.73)	0.98
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	18.4(7.72)	19.2(8.04)	0.71
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	20.5(8.60)	14.6(6.93)	0.04***
<b>&lt;比較文&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	2.0(3.03)	2.4(3.11)	0.90
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	7.5(0.71)	1.2(2.03)	0.02***
3.AはBを正確に理解してくれると思う	1.7(2.69)	2.5(2.84)	0.36
4.Aが他人よりも劣っていると思う	—	2.0(2.75)	—
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	1.5(2.28)	2.1(2.82)	0.76
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	8.0(1.41)	1.7(2.59)	0.02***

\*p<0.05 \*\*p<0.01 \*\*\*p<0.001

れ不愉快になりやすいことが述べられている<sup>13)</sup>。送りの発言内容に対する受け手の捉え方によって、ストレスの感じやすさに差が生じていることに加え、「客観的な意見が得れたと思う」と回答している者の方がストレスを感じにくい結果になっていることから、送りの発言内容をポジティブに捉えなおすことによってストレスを感じにくくなるのではないかと推測される。

表6 送り手からの影響(高群・低群)とストレス反応尺度の平均(SD)との関係 女性(U検定)

	送り手からの影響		p値
	高群	低群	
ストレス反応尺度	平均値(SD)	平均値(SD)	
<ポライトネスな姿勢>			
1.Aが他者より優れていると思う	18.5(6.98)	17.4(7.80)	0.50
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	21.1(6.51)	14.2(8.55)	0.00***
3.AはBを正確に理解してくれると思う	16.8(7.68)	19.1(7.58)	0.58
4.Aが他人よりも劣っていると思う	19.9(7.61)	18.1(7.69)	0.29
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	18.0(7.78)	19.2(7.71)	0.65
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	20.6(6.69)	13.8(8.34)	0.00***
<肯定的な語彙の使用>			
1.Aが他者より優れていると思う	12.0(9.64)	11.3(10.23)	0.68
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	16.6(9.10)	5.0(5.19)	0.00***
3.AはBを正確に理解してくれると思う	13.2(12.97)	13.0(9.18)	0.68
4.Aが他人よりも劣っていると思う	17.8(12.30)	10.8(9.44)	0.04**
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	14.5(11.96)	12.4(9.57)	0.73
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	17.4(8.88)	5.7(5.55)	0.00***
<否定的な語彙の使用>			
1.Aが他者より優れていると思う	22.7(7.30)	22.0(9.53)	0.80
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	24.7(7.71)	14.5(8.28)	0.00***
3.AはBを正確に理解してくれると思う	18.2(9.81)	22.8(8.62)	0.06
4.Aが他人よりも劣っていると思う	25.7(7.90)	20.8(8.98)	0.01***
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	19.6(8.43)	23.5(9.02)	0.02**
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	25.6(7.16)	13.4(6.40)	0.00***
<比較文>			
1.Aが他者より優れていると思う	2.7(5.79)	1.5(2.16)	0.79
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	3.3(5.80)	0.9(1.77)	0.00***
3.AはBを正確に理解してくれると思う	2.1(4.69)	1.0(2.59)	0.18
4.Aが他人よりも劣っていると思う	36.0(0.00)	1.5(2.75)	0.06
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	2.0(4.98)	1.1(2.31)	0.17
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	19.0(24.04)	1.2(2.36)	0.04**

\*p<0.05 \*\*p<0.01 \*\*\*p<0.001

(5) ストレス反応尺度と自己肯定感との関係について  
自己肯定感の高さによってストレスの感じやすさに差があるのかを検討するために自己肯定感高群・低群におけるストレス反応尺度についてU検定を行った(男性:表7, 女性:表8)。

これらの結果から、自己肯定感がストレスの感じやすさに影響を与えているとは言い難く、仮説④「自己肯定感の高い者は、低い者に比べてマウンティングによるストレスを感じにくい」は棄却された。上田ら(2012)の研究において、自己価値観及び問題解決度が高い者は、ストレス耐性(ストレスサーに対し、調和的かつ適正に認知、評価、対処する機能のこと)が高く、ストレス耐性には、男女間で有意差があり、女性の方が高いことが述べられている<sup>8)</sup>。自己肯定感の高い者は、ストレス耐性が高いかも知れないが、ス

レスの感じやすさに差は存在しておらず、その後の捉え方に差が生じているのではないかと推測される。本研究においては、調査対象者に対し、各シナリオを読んだ直後に、受け手の心情を尋ねているため、その後の心情の変化を調査することは難しい。そのため、調査対象者のストレス耐性度を図る項目を設ける等の工夫が必要であった。

表7 自己肯定感とストレス反応尺度の平均(SD)の関係 男性(U検定)

	自己肯定感		p値
	高群(n=23)	低群(n=29)	
<ポライトネスな姿勢>			
I. 抑うつ・不安	4.0(3.60)	4.4(3.04)	0.52
II. 不機嫌・怒り	7.2(3.22)	6.8(3.30)	0.59
III. 無力さ	2.8(2.37)	3.9(2.51)	0.13
IV. 合計	14.0(7.80)	15.2(7.27)	0.46
<肯定的な語彙の使用>			
I. 抑うつ・不安	1.6(2.59)	3.1(3.24)	0.06
II. 不機嫌・怒り	3.3(3.01)	3.8(3.13)	0.57
III. 無力さ	1.0(1.52)	2.6(2.62)	0.02**
IV. 合計	5.8(6.59)	9.5(8.33)	0.13
<否定的な語彙の使用>			
I. 抑うつ・不安	5.2(3.92)	5.7(3.58)	0.71
II. 不機嫌・怒り	8.6(3.35)	8.0(3.09)	0.40
III. 無力さ	3.8(2.95)	5.4(3.16)	0.07
IV. 合計	17.6(8.70)	19.1(7.30)	0.55
<比較文>			
I. 抑うつ・不安	0.7(1.33)	0.9(1.22)	0.22
II. 不機嫌・怒り	0.4(0.72)	0.9(1.14)	0.10
III. 無力さ	0.1(0.46)	0.9(1.22)	0.00**
IV. 合計	1.2(2.26)	2.7(3.06)	0.08

\*p<0.05 \*\*p<0.01

表8 自己肯定感とストレス反応尺度の平均(SD)の関係 女性(U検定)

	自己肯定感		p値
	高群(n=73)	低群(n=80)	
<ポライトネスな姿勢>			
I. 抑うつ・不安	5.6(2.79)	6.2(3.16)	0.18
II. 不機嫌・怒り	8.1(2.61)	7.6(3.40)	0.53
III. 無力さ	4.7(2.63)	5.2(3.26)	0.25
IV. 合計	18.3(6.75)	19.0(8.50)	0.53
<肯定的な語彙の使用>			
I. 抑うつ・不安	3.1(3.18)	3.9(3.38)	0.14
II. 不機嫌・怒り	4.9(3.52)	5.5(3.67)	0.28
III. 無力さ	2.5(2.97)	3.3(3.43)	0.09
IV. 合計	10.4(8.80)	12.7(9.75)	0.14
<否定的な語彙の使用>			
I. 抑うつ・不安	7.1(3.76)	7.6(3.53)	0.42
II. 不機嫌・怒り	9.1(2.97)	8.7(3.62)	0.76
III. 無力さ	5.9(3.08)	6.1(3.61)	0.77
IV. 合計	22.1(8.36)	22.3(9.05)	0.75
<比較文>			
I. 抑うつ・不安	0.5(1.13)	0.9(1.64)	0.08
II. 不機嫌・怒り	0.3(0.86)	0.3(0.76)	0.97
III. 無力さ	0.3(0.72)	0.5(1.01)	0.58
IV. 合計	1.2(2.45)	1.7(2.85)	0.32

(6) 受け手が送り手から受けた影響の回答と自己肯定感との関係について

表9 自己肯定感と受け手が送り手から受けた影響の回答の平均 (SD) の関係 男性 (U検定)

受け手が送り手から受けた影響の回答	自己肯定感		p値
	高群	低群	
自己肯定感	高群	低群	
受け手が送り手から受けた影響の回答	平均値(SD)	平均値(SD)	
<b>&lt;ポライトネスな姿勢&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	3.0(0.93)	3.3(1.03)	0.39
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	2.4(1.27)	3.3(1.22)	0.10
3.AはBを正確に理解してくれると思う	2.0(1.00)	1.7(0.81)	0.21
4.Aが他人よりも劣っていると思う	2.3(0.81)	2.0(0.78)	0.29
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	2.3(1.10)	1.9(1.00)	0.27
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	2.5(1.20)	3.1(1.26)	0.09
<b>&lt;肯定的な語彙の使用&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	3.1(1.25)	3.1(1.30)	0.99
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	2.0(1.13)	2.7(1.17)	0.01*
3.AはBを正確に理解してくれると思う	2.0(1.11)	1.8(0.94)	0.44
4.Aが他人よりも劣っていると思う	1.8(0.72)	2.1(0.94)	0.34
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	2.0(0.98)	1.9(0.82)	0.92
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	1.7(1.14)	2.7(1.23)	0.01*
<b>&lt;否定的な語彙の使用&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	2.2(1.20)	2.7(1.31)	0.17
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	2.7(1.32)	3.5(1.35)	0.08
3.AはBを正確に理解してくれると思う	1.8(1.04)	1.8(0.87)	0.90
4.Aが他人よりも劣っていると思う	2.4(0.99)	2.3(0.88)	0.94
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	2.4(1.34)	2.3(1.28)	0.67
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	2.8(1.14)	3.5(1.33)	0.09
<b>&lt;比較文&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	2.7(1.18)	2.6(1.02)	0.46
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	1.3(0.63)	2.0(1.02)	0.01*
3.AはBを正確に理解してくれると思う	3.3(1.33)	3.1(0.88)	0.37
4.Aが他人よりも劣っていると思う	1.5(0.73)	1.8(0.80)	0.16
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	2.9(1.24)	2.7(1.10)	0.52
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	1.3(0.62)	2.0(0.87)	0.00***

\*p<0.05 \*\*p<0.01

自己肯定感の高さによって受け手が送り手から受けた影響の回答に差があるのかを検討するために、自己肯定感高群・低群における受け手が送り手から受けた影響の回答についてU検定を行った(男性:表9,女性:表10)。

これらの結果から、自己肯定感の高さによって、受け手が送り手から受けた影響の回答に多少影響を与えていると言えるだろう。男女ともに自己肯定感が高い者の方が、受け手の自信への影響が少ないと回答していることから、自己肯定感を高めることによって、マウンティング行為による精神的な影響が少なくなるのではないかと推測される。また、自己肯定感が低いと通常の会話(比較文)において、受け手の自信への影響があると回答している割合が高くなっている。自己肯定感の低さが自信の無さに繋がり、このような結果になったのではないかと考えられる。そのため、自己肯定感を高めていけるよう働きかけることによって、送り手の発言内容の影響を受けにくくなるのではないかと推測する。

表10 自己肯定感と受け手が送り手から受けた影響の回答の平均 (SD) の関係 女性 (U検定)

受け手が送り手から受けた影響の回答	自己肯定感		p値
	高群	低群	
自己肯定感	高群	低群	
受け手が送り手から受けた影響の回答	平均値(SD)	平均値(SD)	
<b>&lt;ポライトネスな姿勢&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	3.0(1.09)	3.1(1.18)	0.68
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	3.4(1.14)	3.6(1.14)	0.09
3.AはBを正確に理解してくれると思う	1.5(0.77)	1.6(0.67)	0.29
4.Aが他人よりも劣っていると思う	2.4(0.86)	2.4(0.86)	1.00
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	2.0(1.07)	2.0(1.07)	0.44
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	3.5(1.11)	3.5(1.11)	0.84
<b>&lt;肯定的な語彙の使用&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	3.1(1.06)	3.1(1.09)	0.93
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	2.9(1.29)	3.2(1.18)	0.09
3.AはBを正確に理解してくれると思う	1.9(0.95)	1.9(0.85)	0.88
4.Aが他人よりも劣っていると思う	2.1(0.78)	2.3(0.91)	0.06
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	1.9(0.91)	2.0(0.94)	0.60
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	2.8(1.35)	3.1(1.28)	0.22
<b>&lt;否定的な語彙の使用&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	2.2(1.06)	2.4(1.14)	0.27
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	3.6(1.17)	3.8(1.21)	0.45
3.AはBを正確に理解してくれると思う	1.6(0.99)	1.9(1.11)	0.14
4.Aが他人よりも劣っていると思う	2.6(1.10)	2.6(1.04)	0.86
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	2.2(1.24)	2.4(1.30)	0.22
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	3.6(1.25)	3.7(1.29)	0.67
<b>&lt;比較文&gt;</b>			
1.Aが他者より優れていると思う	3.1(0.90)	3.2(0.93)	0.82
2.自分自身の全体的な自信がなくなる	1.7(0.76)	2.0(0.89)	0.86
3.AはBを正確に理解してくれると思う	3.5(0.93)	3.6(0.91)	0.88
4.Aが他人よりも劣っていると思う	1.6(0.72)	1.8(0.80)	0.23
5.Aから客観的な意見が得れたと思う	3.2(1.09)	3.4(1.01)	0.65
6.会話の内容(勉強)に対して自信がなくなる	1.6(0.69)	1.9(0.81)	0.01**

\*p<0.05

4 まとめ

先行研究から立てられる仮説を検証した結果は以下のようになった。

仮説①「肯定的な語彙の使用によるマウンティングの場合は、受け手はストレスを感じる」は、肯定的な語彙の使用によるマウンティングが比較文に比べ、男女ともにストレス反応尺度が高い結果となったことから指示された。

仮説②「否定的な語彙の使用によるマウンティングの場合は、他のマウンティングに比べ、ストレスを感じやすい」は、否定的な語彙の使用によるマウンティングと他のマウンティングの関係に注目すると、男女ともに否定的な語彙の使用によるマウンティングの方が他のマウンティングよりもストレス反応尺度が高い結果となったことから指示された。

仮説③「ポライトネスな姿勢が見られるマウンティングの場合は、他のマウンティングに比べ、受け手はストレスに感じにくい」は、ポライトネスな姿勢が見られるマウンティングと他のマウンティングの関係に注目すると、男女ともに、ポライトネスな姿勢が見られるマウンティングは、肯定的な語彙の使用に比べ



ストレス反応尺度が高く、否定的な語彙の使用に比べ低い結果となったことから一部棄却される結果となった。「肯定的な語彙の使用によるマウンティング」のシナリオにおいて、筆者の予想よりもマウンティングの効果が現われなかったためにポライトネスな姿勢が見られるマウンティングの方がストレス反応尺度の得点が高い結果となったのではないかと考えられる。

仮説④「自己肯定感の高い者は、低い者に比べてマウンティングによるストレスを感じにくい」は、自己肯定感の高群・低群におけるストレス反応尺度についてU検定を行った結果、有意な差が認められた項目が少なかったことから、自己肯定感の高低がストレスの感じやすさに影響を与えているとは言い難く棄却された。一方で、自己肯定感の低い者は、「比較文」に対するストレス反応が高く現われ、また「受け手の自信への影響」を高く評価している結果から、自己肯定感の低さが通常の会話（比較文）におけるストレス反応に影響を与えているのではないかと予想される。このことから、自己肯定感を高めていくよう働きかけることによって「送り手の発言内容の影響」を受けにくくなるのではないかと考えられる。

本研究では、全てのマウンティングにおいて、比較文に比べストレス反応尺度の得点が高い結果となったことから、マウンティング行為により受け手に精神的な影響（ストレス反応）があることが明らかになった。

## 5 研究の限界と今後の課題

本研究では、投影法でアンケートへの回答を求める形式のため回答者の想像力に委ねており、回答者によっては、本来の感情とは異なる回答である可能性が考えられる。正当性を高めるために、異なる視点からの調査項目（ストレス耐性や拒否回避欲求に関する項目等）を追加する等の検討が必要であつたらう。また、アンケート調査の回答数が十分でないため、今回の分析で出た結果の全てが正しいとは言い難い。回答数の確保や質問項目の正当性の検討が今後必要である。

## 6 謝辞

最後に、本研究を進めるにあたり、調査にご協力くださいました大学生の皆様にご礼申し上げます。

## 7 引用・参考文献

- 1) 瀧波ユカリ, 犬山紙子: マウンティング女子の世界は笑顔で殴りあう. 9. 筑摩書房, 2017
- 2) 市川真未: マウンティングの特徴について—ポライトネスの原理から—. 日本語日本文学 29, 59-67, 2019
- 3) 森裕子, 石丸径一郎: マウンティングエピソードの収集とその分類—隠蔽された格付け争いと女性の傷つき, お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要 23, 23 - 36, 2, 021
- 4) 沼崎誠, 工藤恵理子: 自己高揚呈示と自己卑下呈示が呈示者の能力の推定に及ぼす効果—実験室実験とシナリオ実験との相違—. 実験社会心理学研究 43, 36-51, 2003
- 5) 岡田文平, 五味侑華, 山崎瑞紀: 自己高揚呈示と自己卑下呈示が受け手に与える印象—シナリオ法による検討—. 東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル 3, 38-41, 2020
- 6) 内藤誼人: 心理戦がうまい人. 三笠書房, 67-70, 2020
- 7) 森川みゆき, 丸山敦也, 大木桃代, 増田知尋, 石原俊一: ライフイベント経験とハーディネスおよび自己肯定感の関連. 生活科学研究 42, 47-55, 2020
- 8) 上田敏子, 窪田辰政, 橋本佐由理, 宗像恒次: 大学生におけるストレス耐性と心理特性との関連. 筑波大学体育科学系紀要 35, 203-207, 2012
- 9) 鈴木伸一, 嶋田洋徳, 三浦正江ら: 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討. 行動医学研究 4, 22-29, 1997
- 10) 吉田綾乃, 浦光博, 黒川正流: 日本人の自己卑下呈示に関する研究—他者反応に注目して—. 社会心理学研究 20, 144-151, 2004
- 11) 吉森丹衣子: 大学生版自己肯定感尺度の作成—カウンセリングの立場を重視して—. 国際経営・文学研究 19, 105-115, 2015
- 12) Kanda Y, Investigation of the freely available easy-to-use software 'EZR' for medical statistics, Bone Marrow Transplantation (2013) 48, 452-458
- 13) 酒井恵子: 自己高揚的呈示の否定的側面に対する反応の個人差. 心理学研究 67, 314-320, 1996
- 14) 吉澤英里: 承認欲求と評価への恐れが社交不安に及ぼす影響. 社会心理学研究 36, 10-15, 2020
- 15) 若林明雄, サイモン バロン-コーエン, サリー ウィールライト: Empathizing-Systemizing モデルによる性差の検討—Empathizing 指数 (EQ) と Systemizing 指数 (SQ) による個人差の測定—. 心理学研究 77, 271-277, 2006

(2022. 9. 2 受理)